

- Alpha が入った式の例（5 + グループのとき）

4 歳

$$N_{4,y} = \frac{\alpha \cdot C_{4,y} \times N_{5,y+1} \times \exp(M)}{\alpha \cdot C_{4,y} + C_{5,y}} + C_{4,y} \times \exp\left(\frac{M}{2}\right)$$

5 + 歳

$$N_{5+,y} = \frac{C_{5,y} \times N_{5,y+1} \times \exp(M)}{\alpha \cdot C_{4,y} + C_{5,y}} + C_{5,y} \times \exp\left(\frac{M}{2}\right)$$

- 上記の式の導出

もともとの式は,

$$N_{A,y+1} = N_{A-1,y} \exp(-F_{A-1,y} - M) + N_{A,y} \exp(-F_{A,y} - M)$$

ですが, Pope の近似式を使えば,

$$N_{A,y+1} = [N_{A-1,y} \exp(-0.5M) - C_{A-1,y}] \exp(-0.5M) + [N_{A,y} \exp(-0.5M) - C_{A,y}] \exp(-0.5M)$$

となります. この両辺に $\exp(M)$ を掛けてやれば,

$$N_{A,y+1} \exp(M) = [N_{A-1,y} - C_{A-1,y} \exp(0.5M)] + [N_{A,y} - C_{A,y} \exp(0.5M)]$$

これは, $N_{A,y+1} \exp(M)$ を $N_{A-1,y}$ から来る部分と $N_{A,y}$ から来る部分に分けてやっています.

$$N_{A,y+1} \exp(M) = \tilde{N}_{A-1,y} + \tilde{N}_{A,y} \quad (1)$$

年の中央の資源量は, $N_{A-1,y} \exp(-0.5M) - C_{A-1,y} = \exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}$ など, なので, 漁獲係数 F を

$$F_{A-1,y} \approx \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}$$

$$F_{A,y} \approx \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}}$$

とします. $F_{A,y} = \alpha F_{A-1,y}$ としますと, 上の式から,

$$\frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}} = \frac{\alpha C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}$$

$$\tilde{N}_{A-1,y} = r\alpha C_{A-1,y} \quad (2)$$

$$\tilde{N}_{A,y} = rC_{A,y} \quad (3)$$

となります。 (1)式の $N_{A,y+1} \exp(M) = \tilde{N}_{A-1,y} + \tilde{N}_{A,y}$ から、

$$N_{A,y+1} \exp(M) = r\alpha C_{A-1,y} + rC_{A,y}$$

より、

$$r = \frac{N_{A,y+1} \exp(M)}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}}$$

なので、 (2)および (3) 式に r を代入すると

$$\tilde{N}_{A-1,y} = r\alpha C_{A-1,y} = \frac{\alpha C_{A-1,y}}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}} N_{A,y+1} \exp(M)$$

$$\tilde{N}_{A,y} = rC_{A,y} = \frac{C_{A,y}}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}} N_{A,y+1} \exp(M)$$

となります。

$$\tilde{N}_{A-1,y} = N_{A-1,y} - C_{A-1,y} \exp(0.5M)$$

などから、

$$N_{A-1,y} = \frac{\alpha C_{A-1,y}}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}} N_{A,y+1} \exp(M) + C_{A-1,y} \exp(0.5M)$$

および

$$N_{A,y} = \frac{C_{A,y}}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}} N_{A,y+1} \exp(M) + C_{A,y} \exp(0.5M)$$

が得られます。 $\alpha=1$ のときは、従来の式になります。 第 1 項目の漁獲尾数は、漁獲係数の割合の近似値として使われていますので、 α が関係してきます。 第 2 項目の漁獲尾数は、資源尾数に足し戻す絶対値としての尾数ですので、 α は関係しません。

ここで、いくつかの近似を使っています。 まず、高齢の M は一定となっています。これが成り立たない場合、このようにきれいに解けなくなるでしょう。 また、漁獲係数 F が漁獲率に等しいという近似も行っており、そのときにも M が一定という仮定を用いています。ただ、そういう仮定をおかないと簡単に解けなくなって、Pope の近似式の魅力が失われてしまうこともあるでしょう.... ということで、ちょっと注意が必要です。 たぶん、Baranov 方程式の場合の α の扱いはもう少し厳密に行われているでしょう（もともと数値計算で解くものなので、（解析的に解けなくなるという）複雑さが問題にならないでしょう）。

【以下、もっと厳密なことを考えようとした場合】

$$F_{A-1,y} \approx \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}$$

$$F_{A,y} \approx \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}}$$

のところ、正確には、

$$1 - \exp(-F_{A-1,y}) = \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}$$

$$1 - \exp(-F_{A,y}) = \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}}$$

より、

$$F_{A-1,y} = -\log\left(1 - \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}\right)$$

$$F_{A,y} = -\log\left(1 - \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}}\right)$$

だから、 $F_{A,y} = \alpha F_{A-1,y}$ とすると、

$$\log\left(1 - \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}}\right) = \alpha \log\left(1 - \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}\right)$$

よって、

$$1 - \frac{C_{A,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A,y}} = \left(1 - \frac{C_{A-1,y}}{\exp(-0.5M) \tilde{N}_{A-1,y}}\right)^\alpha$$

となる。今、

$$\begin{aligned}\tilde{N}_{A,y} &= p N_{A,y+1} \exp(M) \\ \tilde{N}_{A-1,y} &= (1-p) N_{A,y+1} \exp(M)\end{aligned}$$

とおけば、

$$\frac{C_{A,y}}{\exp(0.5M) p N_{A,y+1}} = 1 - \left(1 - \frac{C_{A-1,y}}{\exp(0.5M) (1-p) N_{A,y+1}}\right)^\alpha$$

となる。この式を満たす p を求めれば良いが、これは数値計算でないと解けない。

$$\left(1 - \frac{C_{A-1,y}}{\exp(0.5M) (1-p) N_{A,y+1}}\right)^\alpha \approx 1 - \alpha \frac{C_{A-1,y}}{\exp(0.5M) (1-p) N_{A,y+1}}$$

と近似してやれば、

$$\frac{C_{A,y}}{\exp(0.5M) p N_{A,y+1}} = \frac{\alpha C_{A-1,y}}{\exp(0.5M) (1-p) N_{A,y+1}}$$

となり、

$$p = \frac{C_{A,y}}{\alpha C_{A-1,y} + C_{A,y}}$$

が得られる。

